2015年4月19日八街教会メッセージ

招きの言葉　詩編120篇1-7節

讃美歌　ソングシート26（54年讃美歌530番「うきよのなげきも」）/

ソングシート47（54年讃美歌391「ナルドのつぼ」）

聖書箇所：ホセア6:1-6

　　　　　　　　　　　　　**神を知ろうとしない民**

　本日の聖書の箇所は旧約聖書にある預言者のなかでも最も古い預言書のひとつであるホセア書からです。イスラエルが北と南に分裂し、北の方がアッシリアに滅ぼされる直前にイスラエルの人々に、国の滅びを預言するとともに、「主なる神」に立ち帰れ、と呼びかけているものです。この文書の冒頭に、預言者ホセアに対し、姦淫の女ゴメルを娶れ、という神様の言葉があり、彼はそのようにします。子供の名を、イスラエルが戦で負ける地のイズレエルとつけたり、「愛されない」という意味のロ・ルハマとつけさせられたり、「私の民でない」という意味のロ・アミと名付けさせられたりします。これは、イスラエルが異教の神を拝む、という偶像礼拝に陥ってしまっていたことを、「姦淫」にたとえているのです。神の民イスラエルが姦淫を行っているので、ホセアも姦淫の女を娶ることによって、神様の嘆きを共にすることを要求されているのです。

　そのホセアは5章において、イスラエルに裁きがあるとの預言をし、南王国のユダも主なる神が「引き裂く」という強い調子の裁きの宣言を伝えています。5:15の最後で「彼らは苦しみながら、私を探し求めよう」と言っており、ここでの「彼等」というのはイスラエルの人々の事です。6:1からガラッと調子が変わります。6:1-3はだれかの言葉の引用であり、神の民として忠実に歩もう、と言っています。この部分は、裁かれている民、イスラエルの言葉である、という解釈と、預言者ホセアがイスラエルの民に呼びかけている言葉である、と解釈があります。実は、ヘブル語聖書原典にはないのですが、BC3世紀頃の成立と言われているギリシャ語訳には5:15の最後に「私に言う」という言葉が付いています。「私」は神様のことですから、6:1-3までの引用はイスラエルの民が言ったことば、ということになります。またAD4世紀末頃成立したとされているラテン語訳にも6:1の引用の前に「彼らは言う」という言葉が記されていますので、6:1-3の「さあ、主に立ち返ろう」で始まる言葉は、イスラエルの民の言っている言葉、ということになります。これを前提で考えますと6:1-3の神の民として歩もう、という決意はイスラエルの本心ではなく、一時的に神の民らしきことを言った言葉であり、4節以降、またもとの裁かれるイスラエルに戻ってしまった、ということになります。この解釈に立って、ローマ・カソリックの翻訳である「フランシスコ会訳」は5:15から6:6に「移り気なイスラエル」というタイトルをつけています。また日本基督教団の教会と日本におけるローマ・カソリックの教会が主に使っている新共同訳の聖書では6:1から6:6までに「偽りの悔い改め」というタイトルをつけています。しかし、「言う」という言葉はヘブル語原典にはないものですし、6:1-3を真実の言葉ではなく偽りの言葉である、と解釈するのも聖書の解釈として正しい解釈の仕方なのか、という疑問が起こるのは当然です。6:1-3を読んでもそれが心からの言葉である、ということを否定するきっかけになる言葉はありません。このため、6:1-3はホセアの言葉である、という解釈がプロテスタントの保守派から出てきました。私はこの解釈が正当なのではないか、と考えて居ます。

　そうすると、5章でイスラエルへの裁きが語られるのですが、6:1-3でホセアが主なる神に立ち帰れ、と痛切な言葉をあげる、と理解できます。しかし、イスラエルの民の実体は変わらず、主により頼まず、人間の力に頼る態度を採り続け、6-4-6にあるように主なる神の裁きに立たされる、ということになります。この当時、イスラエルが置かれていた状況は、苦難に満ちた状況でした。北にはアッシリアがあり、機を見てカナンの地を征服しようとしています。これに対し、北イスラエルはシリアと手を組んでアッシリアに対抗しようとしました。しかし南王国、ユダは彼らと行動をともにせず、アッシリアに従う態度を示しました。そのためシリアと北王国は、南王国ユダに攻め入り、ユダはアッシリアに助けを求め、これを契機にアッシリアは北王国を滅亡させ、南王国を属国にしてしまったのです。ホセアの預言は、シリア・エフライム戦争と言われる北イスラエル・シリア同盟軍と南王国ユダの戦いが始まる前夜に発せられたもの、と考えられます。ホセアは北王国も南王国もいずれも主なる神の力に頼るのではなく、シリアやアッシリアの力を頼りにしている、と非難しているのです。宗教的にはシリアやアッシリアの宗教神が民衆の間にかなり行き渡っていたことが想像されます。軍事的に他の強国を頼りにすることと、宗教的状況は表裏の関係にあります。ホセアはそれを、偶像礼拝であり、主なる神への裏切りであり、人間的には姦淫と同じである、と告発しているのです。

　ホセアは言います。「さあ、主に立ち返ろう」。「立ち返る」ということばは、主なる神に背いている状態を悔い改め、主なる神に立ち帰る、ということです。また、ホセアはそうすれば、再び我々は立ち上がることができる、と言います。更に、「主なる神」を知ることを切に追い求めよう、と呼びかけます。旧約聖書で「知る」ということばは、知識を深めるにとどまらず、一体となることを意味します。ヘブル語では「ヤーダー」という言葉です。ここでは主なる神に忠実になり「神の民」にふさわしいものとなる、ということです。すると、3節後半にあるように、主なる神は恵みを示して下さる、というのです。ここに登場する「暁の光」や「後の雨」はイスラエルに対する裁きと「主の日」の描写で有名なヨエル書にもでてまいります。ヨエル書2:2をお読みします。「やみと、暗黒の日。 雲と、暗やみの日。 山々に広がる暁の光のように数多く強い民。 このようなことは昔から起こったことがなく、 これから後の代々の時代にも再び起こらない。」イスラエルには「暁の光」が照らされない、と言っています。2:23をお読みします。「シオンの子らよ。 あなたがたの神、主にあって、楽しみ喜べ。 主は、あなたがたを義とするために、 初めの雨を賜り、大雨を降らせ、 前のように、初めの雨と後の雨とを 降らせてくださるからだ。」主なる神は「初めの雨」と「後の雨」とをイスラエルに降らせてくださる、という望みを語っています。裁きと希望の両方が示されています。ちなみに「後の雨」とは収穫期である春の雨のことです。収穫期は、日本は秋ですが、イスラエルでは春です。ホセア書ではこの恵みの徴である「暁の光」、「後の雨」をホセアは希っているのです。

　しかし、しかしです。4節をみると、ホセアの願いに反しイスラエルは主なる神に立ち帰らず、神様から裁きの声が発せられます。「エフライムよ。わたしはあなたに何をしようか。 ユダよ。わたしはあなたに何をしようか。 あなたがたの誠実は朝もやのようだ。 朝早く消え去る露のようだ」と述べられています。北王国も南王国も真実の信仰にない、と言われています。次の節にもでてきますが「誠実」という言葉は、旧約聖書ではキー・ワードであり「ヘセド」というヘブル語です。日本語では「恵み」、「慈しみ」、「忠誠」、「誠実」等と訳されます。神様の本質を示していることばです。もし、6:1-3をイスラエルの民の偽りの悔い改め、と解釈するのであれば、4節で言うようにそれは「朝もや」のようで「朝早く消え去る露のようだ」ということになります。そして5節において決定的ともいえる裁きが告げられます。再度お読みします。「それゆえ、わたしは預言者たちによって、 彼らを切り倒し、 わたしの口のことばで彼らを殺す。 わたしのさばきは光のように現れる」。ホセアのような預言者を通し、神の言葉によってイスラエルを滅ぼし、裁きの時となる、と言われています。このことは預言者イザヤの口を通し告げられ、北イスラエルの滅亡と南王国の属国化により、現実のものとなります。

　ここで、主なる神の真意がのべられます。「わたしは誠実を喜ぶが、 いけにえ、は喜ばない」と述べられます。「誠実」は先ほどの「ヘセド」です。いけにえ、を無用とおっしゃっているのではありませんが、それより重要なことは、神様の恵みを知ること、神様の慈しみの中に入ること、神様に忠誠を誓うこと、神様に正直に、誠実に対する、ということです。神様はすべて私たちの内側もご存知です。ごまかしは通用しません。また「全焼のいけにえ、よりむしろ神を知ることを喜ぶ 」、と述べられています。ここで「神を知る」と言われている「知る」は3節にでてきた「ヤーダー」です。贖罪の供え物より、「神を知ること」即ち、神の民にふさわしいものとなる、ということです。大国の力を頼りにどちらにつくか右往左往するのではなく、主なる神の導きを希い、その示しに従う、ということです。御心を知る、ということです。後にイザヤを通して明らかになることですが、アッシリアの支配を受け入れる、ことを意味します。しかし、それは心を売ることではない、ということです。主なる神への信仰を堅持しつつ、アッシリアの政治的・軍事的支配を受け入れる、ということです。

　このように、主なる神の求めることは、神様への誠実「ヘセド」であり、神様を知ること「ヤーダー」なのだ、ということは、旧約聖書に根底に流れている、ことです。ユダヤ教において「律法」を文字通り、厳格に守ることだ、という形式主義的傾向はBC3世紀以降の後期ユダヤ教に出てきますが、律法の真実は「ヘセド」であり「ヤーダー」にある、との思想は底流に流れ、新約に繋がって行きます。旧約聖書で同様の趣旨の箇所を若干見てみましょう。ホセア書8:13をお読みします。「彼らがわたしにいけにえをささげ、肉を食べても、 主はこれを喜ばない。今、主は彼らの不義を覚え、その罪を罰せられる」、と言われています。次に1Sam15:22をお読みします。「するとサムエルは言った。 「主は主の御声に聞き従うことほどに、 全焼のいけにえや、その他のいけにえを 喜ばれるだろうか。 見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、 耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる」、と言っています。1Sam16:7をお読みします。「しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る」、と言われています。主なる神に心を見られているのです。ヘセドである主なる神をヤーダー、知りなさい、ということです。

　この6節前半は新約聖書のなかでイエス様が引用されています。マタイ9:13をお読みいたします。「『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです」、とあります。また12:7では「『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』ということがどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、罪のない者たちを罪に定めはしなかったでしょう」、と記されています。ホセア書では「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない」と訳され、マタイ福音書では「わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない」と訳されていますが、旧約聖書のギリシャ語訳と新約聖書のギリシャ語原典を見ると、同一の表現です。ヘブル語の「ヘセド」がギリシャ語の「エレオス」という「同情」、「憐憫」、「慈悲」というような意味の言葉に訳されています。イエス様のおっしゃられたのは、神様との関係でおっしゃられているのでギリシャ語の「エレオス」を「ヘセド」の意味で理解すべきでしょう。マタイ9:13では、イエス様が取税人等罪人といっしょに食事をしたことを批判したパリサイ人に対し、イエス様がおっしゃられた言葉です。神様はイエス様と共に食事をする罪人の心を見て、憐み、これを良しとされるのだ、と言うのです。12:7はイエス様の弟子が安息日に麦穂を摘んで食べたことを批判したパリサイ人に対し言われた言葉です。ひもじい思いをしている弟子達を神様は憐み、安息日に麦穂を摘んで食べたことを良し、としているのだ、と言うのです。「良し」としているのは実は「神の子」としてのイエス様です。ここには、神様が人間を憐れむ「ヘセド」が底流にあるのです。

　6:1から6節までを通してみますと、心から主なる神に立ち帰る、というホセアの切なる願いにも拘わらず、政治的には神に依り頼まず大国の力を頼り、宗教的には、偶像崇拝に走り、主なる神への信仰も一生懸命「いけにえ」を捧げることに変わってしまっている現実でした。主なる神を信頼し、その導きを求める、という信仰の心が忘れられている、というのです。ホセアは、裁きは避けられない、と預言します。私たちの信仰生活を振り返ってみましょう。定型化した宗教的儀礼のみで、心は主イエスから離れ、イエス様がおっしゃられた「愛の律法」に反したことばかりしているのではないでしょうか。教会の兄弟姉妹に対してはどうでしょう。家庭や親戚にたいしてはどうでしょう。更には、回りで苦しんでいる人たちにたいしてはどうでしょう。神様のヘセドを満身に感じ、そしてその感謝の中で、「愛の律法」を実践していきたいものです。また、当時の政治状況をあえて今の日本の状況に当てはめるならば、どちらの国の言っているのが正しいのか、との判断の以前に、戦争を放棄した平和主義国家日本の使命を忠実に果たしていくべきなのではないでしょうか。シリアにつくとかアッシリアにつく、とかいうのではなく、太平洋戦争後、日本に与えられた、戦争を放棄し、戦争の手段としての軍事力は持たない、と宣言した日本の姿勢を固守するのが神様の御旨に沿うものと信じます。日本は日本に与えられた独自の使命があるのです。祈ります。（ご在天の父なる御神様、今日ここに呼び集めてくださり、主の言葉を聞く時を与えてくださりありがとうございます。ホセアの叫びに従わず、国の滅亡に到ったイスラエルのことを学びました。神様は、「いけにえ」より真の心、神様への誠実を求められる、ということも学びました。イエス様は神様の憐みは私たちに注がれていること、そしてそのなかで「愛の律法」を実践することを勧められています。私たちを導いてください。私たちの日々の生活のなかで、また日本の国が世界の中で歩むなかで、ただ主が示される道を歩むことができるよう、お願いいたします。これらの願い、イエス・キリストの名によって祈ります。アーメン）